

**世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、
考えてみる。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あ
した勝てなければ、あさって勝つ。**

夏目漱石『坊っちゃん』

学校を卒業したばかりの正義感あふれる“坊っちゃん”が四国の中学校に数学教師として赴任した。先輩の赤シャツや野だいこなど、偽善的な俗物教師たちを相手に“坊っちゃん”は大騒動をくりひろげる…。歯ぎれのよい文体とさわやかなユーモアあふれる本書は、漱石の作品中最も多くの読者に愛された小説である。
(「BOOK」データベースより転載)

さて、問題です。次のうち、『坊っちゃん』の冒頭部分はどれでしょう？

- A 山道を登りながら、こう考えた。
- B 親譲りの無鉄砲で子供の頃から損ばかりしている。
- C 木曾路はすべて山の中である。
- D ある日の事でございます。

答えは、もちろん B です。坊っちゃんとはとにかく曲がったことが大っ嫌い。小さな頃に母親を亡くしてからというもの、家に仕えているお手伝いのお婆さん、清（きよ）がとにかくかわいがります。それで家族の見ていないところでものをくれるのですが、それに対して坊っちゃんはどう思うのです。

「おれは何が嫌だと云って人に隠れて自分だけ得をする程嫌な事はない。」

この性格は大人になっても変わることはありません。自分の気持ちに正直で、包み隠すことができない。だから、人とぶつかってしまうこともあります。損もします。でも、そんな坊っちゃんに私たちはハラハラしながらも、どこか爽快な気持ちになってきます。

宿直の夜、生徒たちは坊っちゃんにいたずらを仕掛けます。それを問い詰めると生徒たちは知らんぷりして罰を逃れようとします。それに怒る坊っちゃん。

「おれなんぞは、いくらいたずらを仕だって潔白なもんだ。嘘を吐いて罰を逃げる位なら、始めからいたずらなんかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰があるからいたずらも心持ちよく出来る。」

こんな論理でいたずらをされちゃたまったものではありませんが、坊っちゃんは坊っちゃんなりに正義を貫くわけです。彼は本気で「人間は竹のように真直でなくちゃ頼もしくない」と思っているのです。そして、彼にはこんな確固たる信念があるのです。

「世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考えてみる。今夜中に勝てなければ、あした勝つ。あした勝てなければ、あさって勝つ。」

私も世の中はこうであってほしいと心から思います。正直者が馬鹿をみる世の中ではいけません。

さて、そんなある時、教頭である赤シャツが部下から婚約者を奪ったことを知って、坊っちゃんは持ち前の正義感と無鉄砲さをもって懲らしめようとします。さて、その結果は……

この物語の舞台は愛媛県松山市と言われています（本文では四国とあるのみ）。親友の正岡子規の故郷でもあります。実際、漱石も松山で英語教師の経験がありました。作中では、「野蛮な所」とか「田舎」などとかなり辛辣なのですが、松山では「坊っちゃんスタジアム」とか「坊っちゃん列車」とか盛んに「坊っちゃん」の名前がついていて、かえって地元の人は嬉しそうです。

そして学校が舞台ですから、坊っちゃんはこのこと言います。

「教師は、はたで見るほど楽じゃない」

そうだ、そうだ、と頷きながら読むとこんな文が…

「校長なんかになるといやに曲がりくねった言葉を使うもんだ」

はい、以後、気をつけます。

* 冒頭クイズ A：夏目漱石『草枕』、C：島崎藤村『夜明け前』、D：芥川龍之介『蜘蛛の糸』

